

家庭



かげひなた

ひな子

心にも言にも行にもかげひなたがなく正直で、
 人が知つて居ろうと居るまいと、見て居ろうと居
 るまいと、そんな事にはかゝはらずに、正しい事
 善い事を何時も心に考へ且つ之を實行する、悪い
 事はすこしもせぬといふ事は、誠にうるはしい事
 であつて、そうして人は皆かくあるべき當然の事
 であるのは、今更之に述べ立つる必要もごとい

ませんが、果して此正しい自然の通りにいつて居
 りませうか。大きく言へば社會、小さく考へて家
 庭、もつと細かい處で個人々々に、かげもひなた
 もなく、それが皆正直でありましたならば、どん
 なに罪惡といふもの、數が減りませうか。どんな
 にもつと清らかになるでございませうか。尤も一
 方には、「うちの下女はかげひなたなくよく働く」
 と喜ぶ人もあれば、一方には「うちの子はどうも
 偽を言ふが困つたものどうしたらかげひなたのな
 い子になるのであるかと」嘆息する人もある。又
 人の知らぬ間に物を盗んで行く悪人もあれば、陰
 徳を施す善人もある千態万狀の此世の中ですから
 決して一概には申されませんが、とにかく此世に
 はかげひなたがある、かげであるい事をするとい
 ふ不正直ないまはしい分子がまじつて居るので、

之が清淨無垢であるべき幼児にまで及んで居るのは、實に悲むべき事でございます。

天真爛漫のうるはしい性質が一點も害はれず、スラ／＼と無邪氣に發達した子がありましたならば、そうして其子がまだ幼稚で大人の社會の不正直な事も世にかけひなたがあるといふ事も知りませんでしたならば、其子には様々の良い處がありませうが、當然、正直で一點のかざりけもなく無論僞もなく、即ち正直といふ點では申分のない子であるべき筈であります。ところが實際をういかぬ幼児が澤山あります。西も東もまだ知らぬ可憐の幼児であつて已にかけとひなたの別を知り其行をちがへるものがありますのは情ない話であります。そうして之等は決して其幼児自身が「自分是不正直な子にならう」といふ意志をもつてな

つたものではありません。意志のよく發達して居らない幼児を已に不正直にしたのは、實に父母なり何なり其他之を育て訓へ導くものゝ責任であります。よし又不正直に陥るといふほどに悪い方に進んで居らないまでも、少くとも天真爛漫でない何だかシラ、かけとひなたで行がちがふといふ無邪氣でない幼児は中々多くあるので、之等もやはり大人に責任が歸するといふ事にかはりはございません。

幼児同志の悪い感化を受けて其爲に、無邪氣な良い子がいつのまにか、かけひなたを覺えたと思へば、之は無論はじめから悪かつた子のおかげではあります。併しそういう悪感化を受ける境遇に良い子を置いておいた大人がわるい。とにかく大人が全責任を負はなければならぬと思ひます。

ところが其大人、之がまた決して「かげひなたある兒になれ」と望むものではございませぬ。「良い兒になれ」と願はぬ人が何處にございませうか。

此様に幼兒自身も、また其周圍にある大人も決して望んで居らぬのに、實際かげひなたある兒が割合に多いのはどうしてでございませうか。

幼兒がかげひなたをするに至る原因はさまざまでございます。心のまだ軟弱な、しかも摸倣力の盛な時代に悪友のするのを見て之を覚え、一回は一回と其便利(?)を知つて、遂に慣習、性となり、初にはつひ、したものが遂には故意にかげとひなたを作るに至るものでございませう。又あまり大人からさびしく干渉され、一から十までこまかく命令され禁止され、一言一行見のがすまじと見張て居らるゝために、其間の窮窟さ不愉快さの反動

として、其人の見て居らぬところでは、急にヤレ〜と足も腰も伸びた氣になり、前には據なく縮んで居つたものが、打て變つて其人のかねて禁じて居る事もする、命ぜられた事はしない、といふ風な自然にできる裏表が、つもり〜て とう〜自分で故意に、其大人の目を放れた時なり場處なりをつくるといふやうに進むのもございませう。又は一寸した事を冷かに大業に叱られたおそろしさに、其次からは、ふと其事を再びしても故意に之を隠す偽るといふやうな事からはじまるのもございませう。之等は其事柄が已にかげひなたのある事なのですが、こういう事が重なる、つまり「かげひなたのある兒」となるのでございませぬ。そうしてまた一つ、甚だ有力な原因となるおそるべき事柄がございませぬ。即ち、家庭に於け

る家族相互のつまらぬかくしあひ、かげひなた、
及大人が何心なく幼児につきこむ秘密がそれでございませう。

「之は阿父さんには秘密」之は阿母さんに秘密」
「之はお祖母さんに申すな」といふ風なつまらぬ秘密のある、家族間にへだてのあるおもしろくない家庭がもしございましたならば、邪推、怨恨、其他感情の衝突がはじまつて、其家庭の幼児は無論いろ／＼の悪影響を受けませうが、殊に日々大人がかげひなたをして見せる事になるのでありますから、幼児にとつて此方面にどれだけ害があるか知れませぬ。幼児だから何も知るまいと思つてる間にチャント其軟かい脳に自然に深く印象して居るので、まして大きくなり發達するに従つて自ら觀察する力も増して行くのでありますから、家族

相互に此點に深く注意して、まづおもしろくもな
い秘密を家庭外に透ひ出し、相互に信じあつて眞
に奥底のないやうになりましたならば、家庭の愉
快になる事はもとより、そいうふ美はしい良い家
庭には様々の美德が生れ出て、家内中かかげもひな
たもなくたのしく暮らす事になり、其子女は温かに
感化の泉の中に成長するでございませう。それか
ら家族の一部を成して居る僕婢、之も輕からぬ影
響を其家庭の子女に及ぼすのは勿論で、もし主人
の見て居ると居らぬで言行がちがふやうな者でし
たならば、どんなに子女の爲にならぬ事が多いか
知れませぬ。要するに私は、まだ無垢な幼児の側
から考へて、一家内のつまらぬ秘密を除く事の必
要を深く感ずるのでございませう。

又「此おもしろやを誰サンが見るとはしがるから

しまつて置きなさい」「今日バナラマを見せて上げ

た事は歸つても兄さんに言はずに置きなさい」な

ど、いふ事は一寸罪のないやうに考へられて、つ

ひ言ふ事もあるか知れませんが、其實なか／＼罪

があるので、こういう考が万事に及ぶと、やはり

無意に秘密といふ事を幼児に注ぎ込む場合が多く

したが、てかげひなたのもとになる事が多くございま

す。

かげひなたはおそるべき不正直の源ともなる事

を知つた以上、幼児に一點でもそらいふ事のない

やうに、感化を興へ訓へ導いて、天真爛漫な無邪

氣な、正しい善い事は何時如何なる處でもする、

悪い事は何時如何なる處でもしないといふかげひ

なたのない、正直な兒にしたいものでございませ

す。

家庭閑話

そのの子

▲出産の報知に接して『男のお子さんでしたか』と

の挨拶は禁句なり。必らず『お嬢さんでしたか』と

問ふべきにこそと、さる老巧の人の語らるゝを聞

きぬ。生れたる子若し女なりしならんには、左な

きだに失望せる人の口より『ど〜も女の兒でして』

と挨拶せしむることの、いと氣の毒に覺ゆべきに、

後の間に對してならんには、生みたる人も左程に

は思はざるべく、若し男の兒ならんには『イ、ヤ

男でした』と元氣よく答へらるべければなりとの

ことなり。

▲あはれ女はどつちらなきものはあらし、まさか

に木のはしの様にいはるゝにはあはねど、現在

生む母親すら、男の兒をと希ふめり。